

# た ち ば な 新 聞

発行所 宝清寺  
〒197-0821  
東京都あきる野市小川101  
電話 042-558-2663

## お盆

本年のお施餓鬼法要は参列者なしで、七月十七日・八月十二日に式衆だけで厳修致します。お盆の期間にお塔婆を供えて墓参致しますよう

大規模な先祖供養といえば、お盆と春・秋のお彼岸です。お盆は一年に一度、ご先祖が帰ってくると思われ、ご先祖が眠る墓地向き、自宅では迎え火を焚きご先祖を迎え、棚経と言って自宅に僧侶を招いて供養します。お盆の最終日には、送り火を焚き、ご先祖をお墓まで送ります。

当山では、棚経に例年伺っているお宅の他は、ご希望により、伺うようにしています。

ご供養を希望される場合は、新聞に同封したお盆お塔婆申し込み用紙の「お盆供養について」の欄の該当する項目に印を付けてご投函ください。

現在では供養の仕方も簡略化されてきていますが、お盆にはご先祖が眠る墓地にご家族で出向き、お塔婆を建て、お花や供物を手向けご供養致しますよう。

## 住職ひと口法話 第七十三回

夏目漱石の『草枕』の冒頭に「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい」とあり、芥川龍之介は「侏儒の言葉」の中で、「人生は狂人の主催に成ったオリンピック大会に似たものである。我々は人生と闘いながら、人生と闘うことを学ばなければならぬ。こういうゲームの莫迦莫迦しさに憤慨を禁じ得ないものはさつさと埒外に歩さるが好い。(中略)しかし、人生の競技場に踏み止まりたいと思うものは創痕を恐れずに闘わなければならない。」と、人の世の住みくさや人生の厳しさを指摘していますが、それに加えて、現在は、「コロナ禍があり、戦争も行われており経済的な不安も加えられ、更に、厳しい環境の中で生活していかなければならない状況です。」

現代は科学万能・科学文明が進歩している一方、人々は自我我欲の中に生き、人間として本当に大切なものを忘れ去っているのではないのでしょうか。



## 日蓮聖人遺訓 (観心本尊抄)

「石中の火 木中の花」

このご遺文は『観心本尊抄』の一文で、日蓮聖人が私たちの心の中に、仏の心が宿っていることを解き明かされた部分です。『観心本尊抄』は日蓮聖人の大切な教えの軸となる最重要書です。この世の中には、自身の目では見えないものがたくさんあります。

詩人の金子みすゞさんは「星とたんぽぽ」という詩の中で、星の星とたんぽぽの根っこは「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」と語りかけています。

私たちは目に見えない大事なものの存在を見落としがちです。私たちの内面には計り知れない可能性が秘められています。しかしなかなかそれに気づかないことの方が多いのです。今は気づいていない未来や可能性のあることを信じましょう。

人間には本能として自己保存の感情があり、現代ではそれが利己主義となつて極端に現れています。だからといって封建時代のように自己を犠牲にして他人に尽くすだけの生活もできません。現代社会では、どちらかに偏ることは不都合だと思えます。そこで、夏目漱石が学生に講演した「私の個人主義」で「利他主義も利己主義も不都合だとして「個人主義」を提唱しています。「個人主義」とは、他人に尽くすことが自分にもプラスになるという考えです。献血を例に取れば、進んで献血をする人を「利他主義」、誰が使用するかわからないと考え、献血を拒絶する人を「利己主義」とすると、献血をすることによって、良いことをしたと精神的に得るものがあると考えるのが「個人主義」だということです。人に尽くすことで自身が得るものがあると考え、人に「思いやり」をかけることはできるはずで

また、人々は順境におかれると有頂天になり、己を失い甘さ故に転落が始まります。逆境におかれると失意の状態から己を失い自暴自棄に陥ります。そうした状況から抜け出すためには、順境にあつても逆境にあつても己を失わないよう心がけることが肝要かと思えます。

宝清寺の年中行事	
二月節分	厄除け・星祭
三月彼岸中日	彼岸塔婆供養
四月八日	花まつり(灌仏会)
四月八日	オリエンテンプリング
七月十七日	お盆塔婆供養
七月十七日	施餓鬼法要
七月十七日	彼岸塔婆供養
九月彼岸中日	お盆法要
十月十二日	お盆法要
十二月初旬	お盆縮札

## 本堂新築前の航空写真

令和五年一月、一般社団法人映画支援協会の君島登会長のお申し出により、本堂を新築奉納されることになりました。本堂建築に関する詳細は、次号の本紙にてお知らせ致します。令和五年五月二十四日、本堂解体前の航空写真を撮影致しましたので掲載致します。





# 法華経と私たち 第十七回

## 如来寿量品第十六

そのとき薬王菩薩と大衆説菩薩は二万の菩薩と共に、釈尊の前で「世尊よ、ご心配なさらぬでください。世尊の入滅のちに、われらはこの経を保ち、読み、誦し、説くでしょう。後の悪世の衆生は、善根が少なく、高慢で名利を貪り、仏道から離れているので教化は難しいでしょうが、強い忍耐力で、この経を読み、誦し、保ち、説き、書写し、供養して、身命を惜しみません」と誓いの言葉を述べた。そのとき、会衆のなかの受記を得た五百羅漢たちも、釈尊に「世尊よ、われわれもまた、他の国土においてもこの経を広く説きます」と誓った。また、受記を得た八千人の学・無学も、起立して合掌し、釈尊に「世尊よ、われらも他の国土において、この経を弘めます。何故かと言うと、この娑婆世界のものたちは、悪い習慣にひたり、高慢で、積善の心少なく、怒ったり憎んだり、諂ったりして、正直でないからです」と誓った。その時、釈

尊の養母の摩訶波闍波提と学・無学の尼僧六千人が起立して合掌し、一心に釈尊を仰ぎ見て、涙を流してさなかつた。釈尊は「曇曇弥よ、どうして憂い顔でわたしを見ているのか。わたしはあなたに、阿耨多羅三藐三菩提の記を授けなかつたと思つているのか。先に一切の声聞に記を授けたではないか。あなたの記は未来世に仕える三十・八千万億の諸仏のなかで、偉大な法師となることである。また六千人の学・無学の尼僧たちも法師となるだろう。あなたは、一切衆生喜見如来と号するであろう。そして、六千の菩薩たちにつきつぎと記を授けるであろう」と言った。その時羅護羅の母であり釈尊の妃であつた耶輸陀羅は「世尊が大勢の人々に記を授けるなかで、どうしてわたし一人の名を呼ばないのだろう」と思った。釈尊は「お前は来世に十千万億の諸仏に仕え、菩薩行を修し、偉大な法師となつて、具足千万光相如来と号するだ

ろう」と言った。尼僧たちも、他の国土でこの経を弘めることを誓つた。そのとき釈尊は、八千万億の菩薩を見渡した。菩薩たちは釈尊の意を介して、立ち上がり、「世尊よ、われらは如来の入滅のちにおいて、十方を巡つて、衆生がよくこの経を書写し、信じ、読み、誦し、その意味を解し、それを修し、心に思い起こすようにします。どうか、他の世界にいましても、われらをお守りください」と経を弘めることを誓つた。諸々の菩薩は、「仏が入滅のちの悪世のなかで、われらはこの法を説きます。無知な人々が罵詈雑言をはき、刀杖を加えても耐え忍びます。この経を説くためには、無上道を惜しむが故に身命を惜しまず、耐え忍び、たとえ悪しき僧たちに、悪口を言われ、のけ者にされ、寺院から追放されても、村落であれ都であれ法を求むる人があれば、どこへでも行つて仏に託された法を説きます。われらは世尊の使いなれば恐れることはありません。われらは、世尊と十方から来た諸仏の御前において、このように誓います。われらの決意をご照覧下さい」と合掌して誓いの言葉を述べた。

## 新築前の本堂写真



新本堂建設の前に現在の本堂及び内陣を記録として残すよう掲載致しました。



新本堂建設は金剛組（寺社建築の専門の宮大工）と契約を交わすことになりました。現状のままでは大型車両が入れず工事が難しく、本堂を奉納される君島登氏は、仁王像も所有されていることから、山門を壊し、本堂完成後に仁王門として立て替えて奉納していただけることになりました。

新しい本堂の設計は現状の本堂とほぼ同じですが、丸柱を三十二本使用し、屋根は銅版瓦になります。内陣の左側に鬼子母神、右側に八幡大菩薩をお祀り致します。本堂右の高木源一氏奉納の木像は、客殿に安置致します。

本堂建設中ではご法事に影響がないように、水谷庵を仮本堂として使用し、年回忌のご法要は今までもおりお受けできますので、「相談くださるようお願い致します。」



写真上 鬼子母神  
 写真下 八幡大菩薩  
 写真左 高木源一氏奉納木像

